

AMDA

多様性の共存

ジャーナル

2026 年 4 月 25 日 VOL.49 第 317 号

発行 / AMDA 〒700-0013 岡山市北区伊福町 3-31-1 2026 年

TEL 086-252-7700 FAX 086-252-7717

E-mail:member@amda.or.jp

春号

春

救える命があればどこまでも

AMDA と東北、15 年の絆： 東日本大震災復興支援活動総括

特定非営利活動法人アムダ (AMDA)
<https://amda.or.jp/>
 特定非営利活動法人 AMDA 社会開発機構
<https://www.amda-minds.org/>
 特定非営利活動法人 AMDA 国際医療情報センター
<https://www.amdamedicalcenter.com/>
 AMDA 兵庫 <http://amda-hyogo.com/>

東北を中心に未曾有の被害をもたらした東日本大震災から、3 月 11 日で 15 年。AMDA が地震発生翌日に救援チームを現地へ送ったあの時から、AMDA と東北の長い、長いつながりが始まりました。緊急支援から復興支援へと形を変えながらも、絶えず東北への支援を続けてきた根底には、この 15 年で培われた東北の方々との「絆」がありました。



絆を未来へ — 大槌健康サポートセンター

今年 3 月の雪降る日、AMDA 大槌健康サポートセンターで地域住民の皆さんと AMDA 職員の交流会が行われました。「私はみんなと一緒に笑うためにここに来ているんです」。ある女性の言葉に、これまで同センターで育まれてきた地域の絆を知り、心が温まりました。

震災で人口の約 1 割が犠牲となり、全家屋の約 7 割が被害を受けた岩手県大槌町に、AMDA は震災直後から入り、避難所での医療支援や巡回診療、支援物資の配布を行いました。

復興に向かう中、地域では家が残った人と家を失った人の間に断絶が生まれ始めていました。「家のあるなしにかかわらず、被災地住民のみんなが心身ともに健康になれる場所を作ろう」。2011 年 12 月、AMDA の地元スタッフが中心となって同センターを設立。以来、教室事業や鍼灸治療、子育て支援などを通じ、多くの困難を乗り越えながら地域の人たちが集う場であり続けてきました。

同センター長で鍼灸師の佐々木賀奈子さんは、設立当時から携わり続けるただ一人のスタッフです。震災の時、津波に飲まれながらも命からがら助かった佐々木さんは、苦しみの最中に鍼灸師を探していた AMDA と出会い、避難所での活動をともにしました。被災者の体温を手で感じながら鍼治療を行い、心に寄り添って話を聞くことが、佐々木さん自身の生きがいとなったといいます。

「震災は本当に憎い。でもあの地震がなかったら、ここにいるみんなとも AMDA とも会うことはなかった。みんながいたから私はここにいるし、今の大槌がある。感謝でいっぱい」と佐々木さんは話します。「15 年間の恩にただ感謝するだけではなく、生かされたものとして、次は私たちが恩を返し、子や孫へとつないでいきたい」。その思いがこれからの大槌を支え、未来へとつながっていくと考えています。



佐々木賀奈子センター長

被災地と被災地、支えあいつながり—復興グルメ F1 大会

宮城県南三陸町の志津川仮設魚市場で3月29日、『第18回復興グルメF-1大会』が開催されました。宮城、岩手、福島の被災3県や栃木県から15チームが参加し、各地のご当地食材を使ったグルメを来場者に提供。新鮮な海の幸の香りと郷土芸能の太鼓の音が響く会場には、人々の笑顔があふれていました。

被災地域の仮設商店街が集まって2013年11月に始まったこのイベントは、第1回の気仙沼市を皮切りに計18回・11地域で開催され、各地の復興を後押ししてきました。仕掛け人の一人、気仙沼市の南町紫神社前商店街事務局長の坂本正人さんは「被災地域同士で一緒に復興を考えられたからこそ、ここまで復興を果たすことができた」と話します。

震災で商店街が失われた南町。坂本さんは震災から2、3か月後から移動販売でコロケを売り始め、次第に仲間が集まり、仮設商店街を作り上げました。地域復興のために必死で活動する中、震災から1年ほど後に出会ったAMDAの菅波茂前理事長の「少し顔を上げて自分たち以外の被災地も見た方がいい」という言葉が、被災地間の連携を生む転機となりました。「復興状況に差はあれど、地域を超えた仮設商店街というつながりがあることが何よりも心強かった」。こうして生まれた大会は、被災商店街の復興の象徴となりました。



坂本正人さん

「終わるのは寂しいけど、チームF-1は残っていく」。復興の進展を受けて今回は最後の開催となりましたが、これまでにできたつながりを活かして、他地域の災害支援などに取り組んでいく方針です。「地域は違っても同じ被災者として仲間意識が生まれた。またいつか集まれる。それがF-1のあった意味だと思う」。



遠くても、つながっている — NPO 法人仙台夜まわりグループ



プなどの団体と協力して物資を届け続けました。

今も震災による生活の破綻や人間関係の変化が尾を引き、社会的孤立に悩む人がいるといいます。「どれだけハード面で復興しても、精神面での復興に終わりはない」。新田さんの言葉に、震災がもたらした影響の大きさを感じます。

新田さんは、「震災から時間が経つごとに支援は減りました。それでもずっと続けてくれたAMDAさんがいたから、私たちもこれまで支援を続けることができました」と話します。距離を超え、時を超え、岡山と東北のつながりは復興の力となり続けています。

「岡山と仙台はやっぱり遠い。それでも私たちを、東北の震災をずっと忘れないでいてくれることが何よりもありがたいんです」。AMDAが2011年から物資支援を続けてきたNPO法人『仙台夜まわりグループ』の新田貴之理事長は、15年の節目にそう思いを語ります。

2000年から路上生活者への支援を続けてきた同グループは、震災後、住む場所を失った被災者らが仙台市内で路上生活を送るようになったことから、連日の炊き出しで命をつなぎました。備蓄が底をつく中、AMDAはおかやまコー



新田貴之理事長

AMDAは2026年3月末をもって、東北への復興支援に一つの区切りをつけます。しかし、あの未曾有の大災害をともに乗り越え、15年という長い時間をかけて培ってきた「絆」がなくなることはありません。「次は私たちがAMDAさんのように、他の人たちを助けられる存在になりたい」——東北の方々からそのような言葉が生まれたことが、AMDAが創設以来理念としてきた「相互扶助」の理念がこの地に根付いた証です。AMDAはこれからも国内で、世界で、医療支援を通して人と地域をつなぐ絆を育み続けていきます。(勢島 康士朗)

スリランカ豪雨復興支援活動



2025年11月下旬に上陸したサイクロンにより、スリランカでは国土の約2割が浸水し、約170万人が被災しました。1月中旬になっても生活や地域機能の回復が十分に進んでいないエリアが残されていたため、AMDA スリランカ支部からの要請で日本から医師1名、調整員1名、インドから医師1名を派遣。復興への移行期に焦点を当てた支援活動を行うことになりました。

1月18日から20日にかけて、コロンボ近郊にて、医療・食糧支援に加え、教育支援を実施しました。医療系大学 IHS (International Institute of Health Sciences) にて、災害対応能力の向上を目的とした集中講義を行いました。その翌日には学生を伴って被害が甚大であったコロナワ地域のマニティクリニックや保健事務所を訪問。約70人の母子に対して食糧や寝具、玩具を提供し、保健局には文具を寄贈しました。

21日から23日は、地滑り等の被害が深刻であった標高1,800m超のヌワラエリアへ移動。医学生ならびに国内最大のNGOとして知られる Sarvodaya とともに避難所の寺院で支援活動を行いました。414人ものが、プライバシーのない寒さも残る空間で避難生活を続けている状況を確認しました。また基幹病院や保健局を訪問し、復興に向けた課題の共有と提言を行いました。



被災時における今後の改善点を、提言という形でしっかりと現地に申し送ることができました。タクシーの運転手の方に、「スリランカを助けに来てくれた日本人をお乗せして誇りに思う」と言っていたほかに、行く先々で、「日本人は勤勉でまじめな国民だと知っている」という言葉を耳にしました。この期待を裏切らないようあり続けたいと強く思いました。(祖母井 利昭)

24日以降は再びコロンボ近郊に戻り、別のNGOと災害支援セミナーを共催。その後、Sarvodaya 本部、保健省、国連機関、日本大使館を訪問し、今回の活動を報告しました。活動中、AMDA の指導を受けた学生が、調査シートを利用して、被災者が置かれている困難な状況を調査し、診察を手伝いました。

日頃からAMDAをご支援下さっている皆様からのご寄付により、食事や医療支援にとどまらない、“支援の鎖”を次の世代につなぐことができました。また日本からの熱意とともに、



インドネシア豪雨被災者緊急支援活動：現地報告会

2025年11月下旬、激しい豪雨がインドネシア・スマトラ島北部を襲い、各地で洪水や土砂崩れが発生しました。

これを受けて12月4日、AMDA インドネシア支部は、インドネシア・ムスリム大学と連携し、緊急支援活動を開始。本部のあるスラウェシ島から約2,500キロ離れた被災地において、給水のためのタンクローリー車を手配し、巡回診療や物資支援を行うなど、幅広いネットワークを活かした多角的な支援活動を展開しました。また日本からは看護師3名が派遣され、言葉や文化の違いを越えて活動にあたりました。

活動終了後の12月27日には、マカッサル市で活動報告会が開催され、AMDA 本部を代表して参加しました。

救援活動当時、インドネシアチームは航空便が確保できず、隣国のマレーシア経由で被災地まで渡航したことや、陸路で12時間の移動を余儀なくされたことなど、厳しい移動の様子も紹介されました。また、劣悪な生活環境の中で困難な日々を送る被災者の現状や、具体的な支援内容について3名のリーダーから報告がありました。日本の看護師との協力が大きな力となったことも共有され、参加者一人ひとりに感謝を込めて活動参加証明書を手渡しました。(報告会の様子を是非QRコードから動画でご覧ください)(難波 妙)



ネパール訪問記①：AMDA 神女クラブ：ネパール研修

AMDA 神女クラブのメンバー（神戸女子大学看護学科3年生）3名が、2月7日から15日までネパール研修に参加し、西部の都市プトワールに滞在しました。

現地では、AMDA ネパール支部が運営するネパール子ども病院、ならびに同病院付属の医療専門学校を訪問。看護学生との英語を通じた交流のほか、学校生活や文化、スポーツについての発表が行われました。

ネパール子ども病院では、帝王切開術の見学や院内の視察、医療従事者との意見交換を行いました。このほか、ネパール支部や同支部が運営する歯科クリニック、トリブバン大学教育病院、女性のための職業訓練所などを視察しました。

また一行は、世界遺産である旧王宮広場や、仏教およびヒンズー教の寺院も訪れ、ネパールの文化や習慣に直接触れることで、文化的な理解を深めました。参加した学生は、「今回の研修を通して、医療や教育は制度だけでなく、経済状況や文化、生活背景と深く関わっていることを学びました。この経験を今後の学びや将来の目標につなげていきたいと考えています」と話しました。



ネパール訪問記②：AMDA ダマック病院内視鏡研修



2026年2月24日、佐藤拓史理事長がネパール東部ジャパ郡にあるAMDAダマック病院を訪れ、現地の医師を対象とした内視鏡研修を実施しました。

4回目となる今回の研修には、これまで指導を受けてきた医師を含む同病院の医師6名と近隣病院の医師2名が参加しました。上部・下部内視鏡検査のほか、新たな大腸がんの診断やポリープ切除などの内視鏡治療も行われました。

同病院では、佐藤理事長のもとで研鑽を積んだネパール人医師による後進の指導がすでに始まっています。日本の技術がネパールの医師に受け継がれ、少しずつではあるものの、自分たちの力で治療ができるようになってきました。

◆研修に参加した医師の感想：

「本研修を通じて、より良い診断や治療を提供する能力を高めることができました。今後ご指導いただきながら、さらに研修を重ね、内視鏡の技術を高めていければと思います」

ネパール訪問記③：“念願のネパール子ども病院訪問”

ネパール子ども病院（正式名称『シッダールタ母と子の病院』）は、首都カトマンズ以外で初となる母子保健に特化した病院です。1998年、阪神・淡路大震災後に日本とネパールの多くの支援者の協力によって設立され、以降、ネパール西部に暮らす妊産婦や子どもたちの重要な医療拠点となっています。

この度、3月15日から3月18日まで、大阪府在住の歯科医師、篠原嵩英先生が妹様とともに現地を訪問しました。篠原先生の叔父にあたる故・篠原明医師（小児科医）は、ネパール子ども病院の設立に尽力されたものの、病院の着工を見ずに早世されました。今回の訪問は、篠原先生にとって、若き叔父が夢見た同病院の活動内容や診療を見学するという、大変意義深いものとなりました。



《篠原嵩英先生より、今回の訪問を終えて》



「歯科医師としてのキャリアをスタートするにあたり、叔父の軌跡を辿って『シッダールタ母と子の病院』を訪問しました。私自身の誕生日が病院の着工日と同じで、運命を感じ、長年の夢が叶いました。実際に訪れてみると想像以上に規模が大きく、学校も併設されている点に驚きました。一方で日本と比べ、設備不足も感じました。今後も関わり、支援していきたいと考えています」

（あるちゃん ジョシ）

ウクライナ人道支援活動：あれから4年 — 「戦禍」と「日常」

2022年2月24日、日本から遠く離れたウクライナでは、多くの市民が突如として日常を奪われ、避難を余儀なくされました。AMDAは当初、隣国ハンガリーに避難してきた方々に対し、医療支援を実施しました。現在は、ウクライナ国内で避難生活を続ける方々への支援、ならびに現地医療機関を通じた包括的支援へと移行しています。

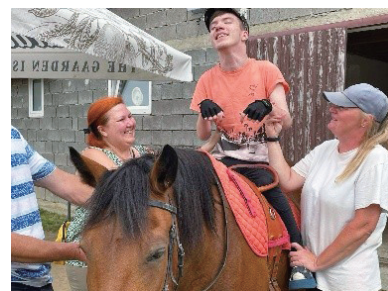
この冬、ウクライナは最低気温がマイナス20度近くまで下がるなど、厳しい寒さに見舞われました。現地協力団体とのオンラインミーティングでは、戦闘が収まる気配のない中でも、人々が支え合いながら懸命に生活している様子を伺いました。

空襲警報が30分ごとに鳴り響き、停電が頻発する東部の主要都市ハルキウには、24時間体制で地域医療を守る医療機関があります。この病院は、停電時には暖房のない人々が暖をとる一時的な避難所となり、また爆撃で暖房設備を失った人には暖房のある住居を紹介しています。その支援は医療にとどまらず、地域の「日常」を支える拠点となっています。

困難な環境下であっても、人々は公園を散歩し、劇場や映画に出かけます。しかし、かつて「ハルキウのスイス」と呼ばれた丘や、多くの森には地雷が埋設されています。市民は地雷が除去された道しか通ることができず、生活は常に危険と隣り合わせです。そんな場所で活動を続ける同病院長の「それでも何とか乗り切った。神に感謝している」という言葉に、戦禍の日常を生きる厳しさを感じ、ただただ胸が締め付けられる思いでした。

また、戦禍は、直接的な爆撃を受けていない地域にもおよんでいます。ウクライナ西部にある医療機関の施設長が「近所の住民や知人も戦死した」と話すように、前線から離れた地域であっても、死は身近にあります。終わりの見えない戦闘による精神的負担は大きく、人々の疲弊も深まっています。そうした中、障がいのある子どもたちをサポートする同施設では、リハビリの一部を休止するなど工夫を重ねながら、活動を継続しています。

「戦禍」と「日常」が隣り合わせに存在するウクライナで、人々の暮らしは今日も続いています。(岩尾 智子)



ウクライナ大使館を訪問しました

2026年1月6日、AMDA副理事長として駐日ウクライナ大使館を訪問し、これまでのAMDAによるウクライナ人道支援活動について報告を行いました。大使館からは、ナディア・ボズディガン一等書記官ならびにユリア・ザモルシカ二等書記官が同席してくださいました。

首都キーウをはじめ、各地での戦闘は続いている一方で、現在も公的医療保険制度のもと、予防接種などの基本的な医療提供は何とか継続されているとのことでした。また、ウクライナ東部の爆撃を受けた地域では、親を亡くした子どもたちが置き去りにされる悲惨なケースも発生しているとの話がありました。

今後についても、大使館として対応可能な協力事項があれば検討したいとの意向が示され、心強く感じました。(難波 妙)



現在ご寄付受付中の活動

- ・緊急救援
- ・ウクライナ人道支援
- ・AMDA フードプログラム
- ・ルワンダ学校保健
- ・カンボジア
- ・ネパール医療支援
- ・インドピースクリニック
- ・内視鏡技術移転
- ・AMDA 中高生会
- ・子ども食堂支援
- ・災害事前対策

徳島での訓練に参加（南海トラフ災害対応プラットフォーム）

2026年1月25日、AMDAは、徳島県庁および美馬市、牟岐町、自衛隊が連携する『南海レスキュー』の実動訓練に参加しました。同訓練は、南海トラフ地震の発生を想定して継続的に行われています。

今回の訓練では、まず事前段階として、1月20日に行われた災害対策本部訓練（『令和7年徳島県CPX』）にオンラインで参加し、救援チームが被災地に入るまでのルート確認を行いました。これは連携自治体や自衛隊と協力して、人員の輸送経路に関する調整を行うものです。

今回の計画では、1) 岡山を出発したAMDAチームが香川県丸亀市まで自走し、2) 丸亀市から徳島県美馬市までは、美馬市行政が陸路でのチーム輸送を担当、3) 美馬市から最終目的地の牟岐町までは自衛隊のヘリコプターが移送を担うという、3つのステップがとられました。



このルートをもとに実際の移動を再現したのが25日の実動訓練です。当日は、AMDAと提携する諸國眞太郎クリニック（岡山）の諸國院長や、*AMDA ERネットワークに登録する医療者、美馬市でAMDAと連携するホウエツ病院の林理事長やスタッフ等も参加しました。訓練を通じ、避難所となる牟岐町民体育館などを定期的に訪れることで、不測の事態に備えていきたいと考えています。（大西 彰）（*災害支援活動人材の事前登録制度）



能登半島地震から2年が過ぎて

能登半島地震から2年あまりが経過した2026年3月、AMDAは石川県輪島市の関係各所を訪問しました。災害直後、大きな陥没やひび割れ、建物の倒壊で交通規制が続いていた道路は、少しずつ整備が進んでいます。一方で仮設住宅が立ち並び、公費解体で更地が広がった町を見ていると、どこか震災から時が止まってしまったように感じ、復興への道のりの長さを痛感しました。

現在の輪島では、住居や人材など、多くの面で課題が山積しています。住宅の再建や修繕にかかる資材費や人件費は発災前の3倍以上に高騰。申し込みから



ごちゃまるクリニックを運営する小浦医師

着工までに長い時間を要し、多くの被災者が仮設住宅での暮らしを余儀なくされています。輪島市では災害公営住宅整備の基本計画も策定されましたが、実際の建設にはまだ時間がかかる見込みです。

避難所での生活から仮設住宅へ、そして住宅の再建。次から次へと課題が現れる状況に、被災された方々は、働き手となる世代を中心に一人、また一人と輪島を離れています。また復興を支える外部人材を受け入れようにも、住宅の不足から難しいのが実情です。

そのような中でも地域に残る被災者の方々は、復興に向けた歩みを止めていません。AMDAが支援を続ける輪島市の『ごちゃまるクリニック』では、巡回診療を通じて知った住民の悩みに寄り添った活動を展開。「限られたスペースで家族と暮らし、電力量の制限などで思いきり料理もできず、子どもたちが日常的に遊ぶ場所もない」—このような不自由の多い仮設住宅で暮らす住民の声を聞いたことで、人々が集い、思いのままに活動できるような拠点の建設を進めています。

また災害の記憶の継承に向けた取り組みも進められています。輪島市立輪島中学校の1年生は、「体験を減災へ」と題した総合探究の授業に取り組んでいます。今年の夏に予定されている語り部活動をより良いものにするため、東日本大震災で被災した宮城県南三陸町の語り部を講師に招いて当時の話を聞き、自分たちの経験や思いを発表して、意見を交わしていました。（大西 彰）



かつて朝市が立った場所は更地に



輪島中学校の福光校長

AMDA こども食堂プラットフォーム トライフープ岡山とバスケ交流

2026年1月17日、岡山県を拠点とするバスケットボールB3リーグのクラブチーム『トライフープ岡山』が、県内の子ども食堂とバスケ交流プログラムを行いました。参加したのは、同チームに所属する選手と、倉敷市立味野小学校に通う児童 17 名です。

当初、子どもたちは、大きな体格の選手にびっくりした様子でしたが、ボールをドリブルしながら逃げるバスケ鬼ごっこ、タッチ鬼ごっこ、とりかごゲームなどを通じて、ボールに慣れ親しんでいきました。選手たちによる「ナイスプレイ!」「次、がんばろう!」などの声掛けに励まされながら、積極的にプレイしていました。

コーチからは、「バスケを楽しむこと」「失敗しても大丈夫」「何度もチャレンジすること」等の言葉を掛けてもらい、またバスケットボールが団体競技であることから、「友達のプレイを見ている時は、しっかりと応援すること」などの重要な点も教わりました。

終了後は、昼食会や選手への質問コーナーなどを通じて、楽しい時間を過ごしました。AMDA こども食堂プラットフォームでは、食事支援をはじめ、子どもたちの健やかな成長を願い、様々な体験・活動の機会を提供しています。(難波 比加理)



AMDA 中学高校生会 30 周年記念同窓会を開催

AMDA 中学高校生会（以下、AMDA 中高生会）は 1995 年に発足し、昨年、創立 30 周年を迎えました。これまで多くの方々のご支援・ご協力により活動を継続し、卒業生は延べ 600 人を超えます。

昨年 12 月 28 日に開催された『AMDA 中学高校生会 30 周年記念同窓会』には、2001 年度の卒業生から現役メンバーまで、約 30 人が参加しました。当日は世代を超えた交流が広がり、かつての仲間が久しぶりの再会を喜び合う様子や、当時の思い出話に花を咲かせる姿が見られました。また現役メンバーにとっても先輩の経験や言葉に触れる貴重な機会となり、会場は終始温かな雰囲気になりました。

歓談中、2005 年度卒業の OB と 2023 年度卒業の OG が登壇し、当時の活動や学びについて発表しました。「中高生会だからこそ挑戦できる経験を通して、自分自身の成長につながった」との言葉が印象的で、世代を超えたつながりや中高生会の意義が改めて共有される機会となりました。

「誰かを笑顔にしたい」「何かの役に立ちたい」というメンバーの思いは、発足から 30 年を経てもなお、変わることなく受け継がれています。AMDA 中高生会は、その歴史を大切にしながらも、時代に合わせて、新たな挑戦を続けていきたいと考えています。ここでしかできない経験を通じ、中高生にとって、未来へのきっかけづくりの場となるよう努めてまいります。(金高 摩耶)



寄付贈呈：(株) 中野コロタイプ様

岡山で 92 年の歴史を持つ総合印刷会社、株式会社中野コロタイプ様は、18 年にわたり AMDA のロゴを印刷した年賀状を販売。代金の一部を寄付することで、当団体の活動を継続的に支援してくださいました。長年にわたり購入を続けてくださるお客様も多く、今回は約 300 件もの注文が寄せられたとのことでした。

この度、AMDA 本部で行われた贈呈式では、同社の年賀状担当の方より、「多くの方々の支えによって続けてこられた取り組みであり、今回の寄付も世界の皆様のために役立ててほしい」とのお話がありました。長年の活動におけるエピソードの一つひとつから、本取り組みへの深い思いが感じられました。

多くの方にご支援いただいた「AMDA 募金付き年賀状」ですが、近年の年賀状文化の変化などを踏まえ、本年(2026 年)の年賀状をもって終了となりました。今後は別の方法で貢献していきたいとのことでした。長年にわたり本取り組みを支えてくださった同社、ならびにご賛同・ご協力いただいたすべての皆様に、心より感謝申し上げます。(勢島 康士朗)

